

卯の花の匂う垣根に・・・

64回（昭和32年3月卒業） 渡部 功

1 小学唱歌「夏は来ぬ」

子供の頃、「夏は来ぬ」という小学唱歌を教わりました。作詞が佐々木信綱、作曲が小山作之助（注1）です。一番の歌詞は「卯の花の、匂う垣根に 時鳥（ほととぎす）早も来鳴きて 忍音（しのびね）もらす 夏は来ぬ」というもので、古典文学者によって作詞された19世紀の古い歌曲ということもあってか、子供の頃は「忍音」の意味もよくわからず歌っていました。



「卯の花」、これは、初夏に白い花を咲かせる「ウツギ」の花を指します。「卯月」とは旧暦の卯月（4月）のことで、現在の4月の下旬から6月中旬に当たります。ウツギがこの頃に咲くところから「卯月の花」と呼ばれ、『万葉集』にも『枕草子』にも出てきます。「早も来鳴きて」は、

「早く来て鳴いている」の意味で、「忍音」は、人知れず声を潜めて泣くことを意味しますが、「ホトトギスの初音のこともいい、この歌では、この年に初めて聞くホトトギスの鳴き声を指していますが、この言葉は、『古今和歌集』や『枕草子』などの古典文学にも登場する古語の一つです。

つまり、一番の詩で歌われているのは「卯の花の咲く垣根にやって来たホトトギスの初音に夏が来たことを感じられる」という意味になります。

稲垣栄洋（注2）著『赤とんぼはなぜ竿の先に止まるか～童謡・唱歌を科学する～』（東京堂出版）に「ホトトギスは垣根にやってくるのか？」という項目があり、「卯の花の植物名はウツギである。」との記述があり、「匂う」についても「卯の花は殆ど匂わないので、卯の花の香がするという意味ではなく、花が盛りに咲いているさまである。」との説明があります。ただし、「ウツギと呼ばれる植物は、6科11属にのぼり、様々な植物がウツギと呼ばれているので、中には香りのある種類もある」とも述べています。調べてみると、アジサイ科（ユキノシタ科/バイカウツギ属）のウメに似た花を咲かせる「バイカウツギ」の花には、ほのかな匂いがあるということです。

本県遊佐町出身の鳥海昭子（注3）さんは、『ラジオ深夜便誕生日の花と短歌365日』で、ウツギを6月2日の花とし、次のように詠んでいます、「卯の花匂う」の表現は、やはり「花が盛りに咲いているさま」としての意味なのでしょうか。それともこのウツギは、バイカウツギのような芳香を放つウツギの類なのでしょうか。

ひっそりと卯の花匂う路地を来て今は秘密とするものもなく

「秘密」の花ことばを持つウツギを路地で見つけました。年を重ねると隠しごとも少なくなるものですね。「卯の花」の別名があります。

（注1） 佐々木信綱は、明治5年（1872）、現在の三重県鈴鹿市に生まれ、6歳まで過ごす。父弘綱から『万葉集』や西行の『山家集』などを暗唱するよう言われ、暗唱したという。生涯に1万余首を作歌し、第1歌集『思草』から第9歌集『山と水と』や『佐々木信綱歌集』など、多くの歌集を刊行した。一方、『万葉集』の研究者として『校本万葉集』を刊行するなど、万葉集の研究とその普及に尽力した。昭和38年（1963）92歳で没。

小山作之助は、文久3年（1864）現上越市に生まれる。明治13年（1880）、家人に無断で上京、現在の明治学院大学で英語と数学を学ぶ。明治16年（1883）、文部省音楽取調所に入学し、伊沢修二に師事。首席で卒業し、教授補助として教壇に立った。教え子に滝廉太郎がいた。明治30年（1897）に教授となったが6年後に退職した。その後文部省の唱歌の編纂委員となり、作曲や他の委員の指導に当たった。日本音楽教育の父と言われた。昭和2年（1927）、63歳で没。

(注2) 昭和43年(1968)静岡県生まれ。平成5年(1993)、岡山大学大学院農学研究科修了の農学博士。専攻は雑草生態学。大学院修了後農林水産省入省、平成7年(1995)、静岡県庁入庁、農林技術研究所などを経て、平成25年(2013)から静岡大学大学院教授。研究分野は、農業生態学、雑草科学。研究の傍ら雑草や昆虫など身近な生き物に関する著述や講演を行っている。

(注3) 本名を中込昭子といい、昭和4年(1929)年、飽海郡遊佐町上巖岡の宿坊「山本坊」に生まれ、19歳で上京、苦学して大学を卒業し、児童養護施設、東京家庭学校の先生としての仕事に就いた。仕事に関わりながら短歌の秀作を次々に発表し、昭和60(1985)年、歌集『花いちもんめ』で現代歌人協会賞を受賞した。口語的な表現と自由旋律で、人間への深い愛情を詩情豊かに詠い注目された。『どっぴん語り』、『逆立舞』などの歌集のほか、『種をにぎる子供たち』、『語り部歌人鳥海昭子のほんのり入院記』などのエッセイ集も多数ある。平成17(2005)年からNHKのラジオ番組「ラジオ深夜便」の中で「誕生日の花と短歌365日」を発表していたが、放送中の平成17(2005)年10月に亡くなった。逝去後の平成26(2014)年5月8日に生家の庭園に「季とき)外(そ)れて 咲くタンポポの 小ささよ それでいいのよ それでいいのよ」という2月7日の花を詠んだ短歌を刻んだ歌碑が建立された。

2 ウツギという木の特徴

ウツギは、北海道から九州、奄美大島までと自生地分布は広く、昔は畑などの耕作地の境界木としてよく植えられましたが、丈夫で育てやすいところから現在でも生け垣や植え込みとして住宅や公園に植栽されます。また、幹は材質が非常に強く粘り気があるところから桐ダンスなどの木釘に利用されます。

「空木(ウツギ)」は、幹が空中であるところに、その名の由来があり、別名の「卯の花」は、既述のとおり旧暦4月(卯月)に開花するところからそう呼ばれます。アジサイ科ウツギ属の落葉低木です(注)。

豆腐のおからにアブラゲ、コンニャク、ゴボウ、ニンジン、シイタケ、ネギなどを加えてゴマ油で炒めた料理の名前にも「おから・卯の花」という料理があります。

(注) アドルフ・エングラー提唱の植物分類体系である「エングラー体系」を基に、昭和28年(1953)代~昭和39年(1964)代にハンス・メルヒオールが提唱した「新エングラー体系」では、ユキノシタ科に分類されていたが、昭和55年(1980)代にアーサー・クロンキストが提唱した被子植物の分類体系では、アジサイ科に分類された。現在では旧分類となっている。

APGではアジサイ科ウツギ属に分類されている。APGとは、これまでの分類において、「植物を形態や構造に基づいて分類する方法」が採用されていたが、これに対して「葉緑体DNAの解析で被子植物の系統関係を解析して分類する方法(1998(平成10)年公表)」になり、日本でも2009(平成21)年から採用されている。被子植物系統研究グループ Angiosperm Phylogeny Groupの頭文字をとったものである。

被子植物というのは、胚珠が子房に包まれている植物で、これに対する裸子植物は、胚珠が子房に包まれておらず、露出している植物をいい、マツ類、イチョウ類がこれに該当する。

前述のとおり、「ウツギ」は、幹が空中であるところに、その名の由来があると言われていますが、「森林インストラクター東京会」の調査結果によると、中空のものは、アジサイ科(ユキノシタ科)ウツギ属のもの(ウツギ、マルバウツギなど)で、それ以外のもの(ノリウツギ/アジサイ科(ユキノシタ科)アジサイ属、ハコネウツギ/スイカズラ科タニウツギ属、コゴメウツギ/バラ科コゴメウツギ属など)には、中空でなく、髓がしっかり詰まっていました。

ウツギの芯が空洞である理由ですが、樹木栽培家の上条祐一郎さんの解説(NHKの『趣味の園芸』平成27年(2015)6月号)によると、少ない材料で枝を作るための知恵だということです。つまり、芯まで詰まっているものに比べて枝が軽く、自身の重さを支えるために枝を太くする必要がなく、根から吸い上げた水や、葉で作った栄養を、枝を長く伸ばすことに集中させることができるからで、このようなウツギの仲間は、長く伸びる枝に沢山の花をつけることができるのだそうです。

3 万葉集や枕草子にも出てくる卵の花

ところで、「夏は来ぬ」には、卵の花の匂う垣根にホトトギスが来た、とうたわれていますが、卵の花は、『万葉集』にも多く出ているとのことでしたので、手持ちの伊藤 博著『萬葉集釋注』（集英社文庫ヘリテージ）で調べてみたところ、24首に登場し、その内14首がホトトギス（霍公鳥）とセットで詠まれていました。巻8の1472に石上堅魚（いそのかみのかつを）が詠んだ歌がありましたので、紹介しておきます。

霍公鳥、来（き）鳴き響（とよ）もす、卵の花の、共にや来（こ）しと、問はせましものを

霍公鳥が来てしきりに鳴き立てている。お前は卵の花の連れ合いとしてやってきたのかと、尋ねたいものだが。

なお、この歌には、「神亀5年（728）に大伴旅人の妻の大伴の郎女が病気のために亡くなったので、石上堅魚が弔いに遣わされ、弔いが終わった後に大伴旅人や大宰府の役人たちが、記夷城（きいじょう、現在の基山）に遊んだ時の宴の場でかわした歌である。」との注記がありました。

また、清少納言の随筆『枕草子』には、「五月御精進（さつきのみそうじ）のほど・・・」の書き出しによる全10段がありますが、ここでは卵の花と同じく初夏の風物詩であるホトトギスの鳴き声を聞きに行った清少納言一行が卵の花の枝を折って車に飾って帰る話が綴られています。

4 ホトトギスの習性など

南アジアで越冬し、日本に繁殖のためやって来る夏鳥です。この鳥は「てっぺんかけたか」とか「とつきよきよかきよく」が「聞きなし」（鳥の鳴き声を人の言葉に置き換えて表すこと。）として有名です。

毎年飛来する時期が正確であるところから、田植え時期の合図や季節の区切りを告げる「時鳥」という漢字が当てられますが、他によく使われる漢字としては、「霍公鳥」「杜鵑」「不如帰」などがあります。

ホトトギスは托卵習性（自分で巣を作らず、産んだ卵を他の種に預けて、子育てをしてもらうこと。）があり、ほとんどの場合、ウグイスがその相手です。ホトトギスの卵はウグイスの卵に似たチョコレート色で、大きさはウグイスのそれより数ミリ大きく、ウグイスの親鳥が巣を離れたわずかなスキに、ホトトギスが巢内に卵を産み付け、ウグイスの卵を一つ持ち去ります。ウグイスに温められたホトトギスの卵は、ウグイスの卵より早くかえり、生まれた雛は数時間後には、ウグイスの卵を背中に乗せ、巢の外に放り出し、親の世話を独占して大きくなります。ウグイスの親は自分の子供の2倍ぐらい大きな雛を育てることになりますから、相当な負担になることでしょう。

托卵される鳥には、ホオジロやオオヨシキリなど28種があるそうですが、彼らは必ずしも無条件で托卵されるわけではなく、ホトトギスが巣に近づけば、追い払ったり、時には直接攻撃したり、巣の中に産み付けられた卵を見つけて、その卵を巣の外に放り出したりすることもあるそうです。

万葉人もホトトギスが托卵習性をもっていることを知っていたようで、『万葉集』巻9 1755に高橋虫麿の次のような長歌がありました。

うぐいすの 卵（かひご）の中に ほととぎす ひとり生まれて 汝（な）が父に 似ては鳴かず、汝が母に 似ては鳴かず 卵の花の 咲きたる野辺（のへ） ゆ 飛び翔（かけ）り 来鳴き響（とよ）もし 橘の花を居散らし ひねもすに 鳴けど聞きよし 賄（まひ）はせむ 遠くな行きそ 我がやどの 花橘に 棲みわたれ鳥

ウグイスの卵の中にいるホトトギスよ お前は唯一人生まれて、自分の父に似た鳴き声も立てなければ、自分の母に似た鳴き声も立てない。しかし、卵の花の咲いている野辺を渡って飛びかけて来てはあたりを響かせて鳴き、橘の枝にとまって花を散らし、一日中鳴いても聞き飽きることはない。贈り物はちゃんと上げよう。遠くへ行かないでくれ。我が家の庭の花橘に棲みついておくれ、この鳥よ。

5 夏は来ぬの全歌詞

最後に、「夏は来ぬ」の全歌詞を掲げておきます。

夏は来ぬ

- 一 卯の花の、匂う垣根に 時鳥（ホトトギス）、 早も来鳴きて 忍音（しのびね）もらす、 夏は来ぬ
- 二 さみだれの、 そそぐ山田に 早乙女が、 裳裾ぬらして 玉苗（たまなえ）植うる、 夏は来ぬ
- 三 橘の、 薫るのきばの 窓近く、 蛍飛びかい おこたり諫（いさ）むる、 夏は来ぬ
- 四 棟（おうち）（注） ちる、川べの宿の 門（かど） 遠く、水鶏（くいな） 声して 夕月すずしき、夏は来ぬ
- 五 五月やみ、 蛍飛びかい 水鶏（くいな） 鳴き、卯の花咲きて 早苗植えわたす、 夏は来ぬ

（注） 棟は、「梅檀（せんだん）は双葉より芳し」の梅檀の古名。この樹木は5～6月ごろに薄紫色の花を咲かせる。